

十一月作品

月集スバル



☆今月の四人☆

初法師ぜみ

水 島 晴 子 兵 庫

吃るごと怒るごとくに声挙げつ八月六日初法師蟬

雪ぐにのふかき節度と慈愛もて接したまへり山本清氏

まづしかる追憶さへもよろこびて聞きくださりき 旅人かへらず

憑物が落ちたるやうに暑さ退き灰白のみち宅配車来る

ひまはりが庭に咲くよと無邪気なる葉書を寄越し疾く逝きしひと

水のとよみ

森 重 香代子 山 口

大いなる蓮のはちす一花ほの紅く雨に咲きをり灯れるごとく

うち茂り猛はちすむらだけしかる蓮叢まだいくほんの蕾をかかぐ

白緑の蓮の広葉の露の玉ころがり止まず転がし止まず
降る雨に蓮は咲けりはちすこんな所まで付いては来まいコロナウイルス
降る雨をよるこぶ亀か頭かしら立て水のとよみを泳ぎて止まず

蜜の時

影 山 一 男 千 葉

若き日の証明として思ひ出づ新宿「談話サロン滝沢」

西口の「滝沢」で婚の約をせし指輪はいつこ四十年過ぐ

東口の「滝沢」に集ひ新雑誌語りし蜜の時遙かなり

初対面の小島ゆかりのベレー帽赤か紺かを思ひ出せずも

黄金の時間がわれに在りしこと思ひ出でつも木槿の揺れて

仏陀のやうな一粒

宮 里 信 輝 神奈川

いちめんの田の黄金は吞まれゆく唸りてうごくキャタピラマシンに
てのひらにのせて聞きをりはるゝかななる米の歴史のひとつぶのこゑ
ひとつぶに聞けば語れりかなゝたなる米の来し方悲喜懊悩を
てのひらにのせて語るを聞きやれば米の仏陀のやうなひとつぶ
きみたちははくらが支へてゐるんだよ無名の米のひとつぶのこゑ

☆

☆



杜 沢 光一郎 埼玉

馬上より挙手の礼せる叔父の写真少年われの憧れなりき

近所の農家で働きてゐし農耕馬どの馬もどこの馬もやさしかりにき
兵隊になるなら騎兵になり寝食を共にせんとぞ思ひゐしわれ
軍馬と呼ぶ馬ゐて多くの兵士らと斃れて還らず罪もなきものを
馬の蹄を洗ひやる夢も見しといふ兵たりし柊二の一首をぞ想ふ

武 田 弘 之 神奈川

医療者をねぎらふと都市上空にブルーインパルス^{ハト}を描く
孟蘭盆会休むと寺僧告げて来つ新型コロナウイルスに触れず
半顔を隠せるマスク美女たちに出会ふたのしみありて街行く
芭蕉の句、啄木の歌に文法の誤りあるを思ひ親しむ
稲荷社の池の水面に漂ひてヒカリモは鈍き光を放つ

高 野 公 彦 千葉

遠方の友より雁の使ひ来て楽しからずやコロナ籠もりも
市川市の広報不敵(コロナ戦)がんばる日本は不滅と記す
朝あさに手帳を覗く習慣消えわれの輪郭茫漠とせり
竹箴をシウケと呼びし母のことなつかしきかなシウケのひびき
ビニール傘つひに壊れたりありがたう僕より先に壊れてくれて

仲 宗 角 三重

三つ四つカミナリ落ちてしづまりし山ひとつのごとくなにかさぎめく
庭に置く鉢の草花いつのまにかけもの喰ひてのこれるは無し
子持ちの鮎とどけてくれたる山の人かへりのかごに豚肉さげゆく
東京といふところに来たあとを軍が待ちあてかり立てられき
在京の学生まとめて二百人のがさず綱うつ国の巧みさ

奥 村 晃 作 * 東京

滝水の内^{なご}垂直に登り行く大き真鯉を応挙は描けり
孔雀と松克明に写す襖絵を大乘寺に収め応挙は没す
仔犬の絵ぼあぼあ線の描きたるこれも応挙のスーパード写実
板橋区短歌大会取り仕切る結束氏死すとその妻告げ来
万両に隣る千両株が増え丈伸びてその葉広くなりたり

日 影 康 子 富山

亡き父の愛せしふる里の福光焼手ざはりごつき厚手の深茶碗
逝きてはや十年経たり祥月^{しやうげつ}命日子にそなへし桃甘やかに香る
大家族の寺に嫁ぎてふたりの男の子育てし速き戦後いとむ
寺の娘は寺に嫁ぐが倅せとつねづね言ひきふる里の祖母は
稲ばらみの稲田に防除のくすり撒く無人へりの音野づらに響く

古 屋 祥 子 群馬

草もみち風がそろりとゆけば見ゆ思ひにまさるくれなるの濃さ
太古より天然自然の水湛へ今も変はらず、そをば「淵」とぞ
にんげんの知らざる時間如何ほどか(過ぎたる刻)は想ひ及ばず
「利平茶屋」なる一亭の名残かと、と見かう見すれどただの崖^{がけ}つ縁^{ぶち}
山頂と足尾の軌道廃止あとと這ひつく一人が遮二無二登る



桑原 正紀 東京

草稿と言ひ詠草と言ふときにわれの曠野あらのにそよぐ若草

魂の中なる鬼がをりをりに刮目をせり瞑目をせり

ことばもてわれの深処ふかどをさぐりつつ蟻地獄釣りふとも思ひき

まひるまのハイビスカスの花にきて黒揚羽ひたと瞑目したり

夕まけてひぐらしのこゑふる森になつかしき死者たれかれ思ふ

狩野 一男 東京

ウエーバー世代の我はゆめ書かず彼をマックス・ヴェーバーなどと

ヒゲばかりやけに濃くなる粗くなる二〇二〇年コロナ禍の夏

かりそめの恋、たはむれの愛おもへ八月二十日よるの暑さに

七十にもしもなつたら妻だけを、妻だけに、とかなるならあめん

七十にもしもなつたら生き方をぐわらりと変へて雄々しく老いむ

岡崎 康行 新潟

家つつみ外は狂気の雨つづくたつた一枚のガラス分かちて

だれもゐない台所より音のして今朝のコーヒー沸き始めたり

まだ暑き夜ふけの庭に零れ落ちちちと聞こえし蟬の鳴き声

五十年住み続け来しこの家の手足いつぼんが持ちこたへをり

梅雨をはる暴力的な雨の音ふつと息飲むごときときあり

小島 ゆかり 東京

梅雨明けずコロナ終はらぬ八月の風を見てをり雨中のかせを

転居してまた転居していよいよどこか遠くへ行きたしわれは

雷鳥も転居をしたり八月の乗鞍岳から木曾駒ヶ岳

街なかでなにか眩くこのごろの後ろ姿の無防備なこと

猛暑茫々ろれつあやふく言ふ母に九十歳の言ひ分があり

木畑 紀子 京都

蜜吸ひにくる蜂どもをしとむべく木樫に懸かる大円網あり

放射状に渦巻状に糸を編みおのが宇宙をつくるささがに

くもの網いに霧吹きかけて小宇宙夏なつの濃闇にかがやかせたり

精緻なる網を張りへて円心にもどるささがにの孤独しげし

縷いとのごとく歌詠みつぎていまはその縷にすがりをりわが蜘蛛の糸

島田 暉 神奈川

一億が火の玉になりそれぞれが榴弾持ち戦車爆破と

焼夷弾が前後左右に破裂して逃ぐるほかなき火の玉の民

したたかに雨粒叩く音のな科学徒兵らの軍靴の音す

戦後すぐ総懺悔とかのたまはれ火の玉児童もぬけの露玉

一億が総活躍と旗振れど臨時や非正規暗くからまる

大松 達知* 東京

括線の上はことしで50なり下の数字は知らないけれど

憂いことをはなれて憂さはただよえり 松ぼっくりで炭は熾せる

検索しておそらくはベニカノコソウ知って歩いてもう忘れてる

手遊びに餃子の写真出しておりなんだろうもっと生きんと思う

ああわれにとおいむかしがありまして月夜げつよというを食いしことあり

田宮 朋子 新潟

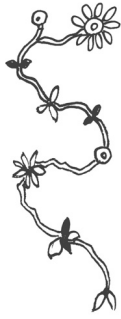
大花火大会中止となりし夜あかみ帯びたる月球のぼる
巨大なる火星のやうな赤き月ウッドデッキで夫と見てゐる
日々明日の昨日の今日を生きてゐて光のさすは今の今のみ
至福なる眠る間際よ暗闇に溶けこみてゆくことを怖れず
猫の墓ちかき藪にて初若荷うすき黄色の花咲かせをり

津 金 規 雄 神奈川

大正はヒコキの時代 複製機そは何よりもガガンボに似る
いくさまで大らかなりしよ決闘のさまさながらの空中戦ありき
スピリット・オブ・セントルイスは単葉の単発にして大西洋越ゆ
著名人の子女誘拐の多発せし世紀ありにきリンドバーグまた
文明の極みか空を航く希ひ宇宙を侵す仕儀となり果つ

小 山 富 紀 子 京都

三分の二つ分けし鰻いま二分の一に分くる丑の日
思ひ出の賞味期限の切れにけり亡き母の靴三十足捨つ
これを着し母の笑顔が浮かび出てまた捨てられぬシャネルのスーツ
社会的距離を保ちて手に入れし出町ふたばの豆餅うまし
半衿の浅葱の色もみづみづし二冠へいどむ藤井聡太君



清 水 正 子 神奈川

眠るときエンヤの(オンリー・タイム)聴くコロナ疲れのころろ洗はむ
長期記憶もとより短期記憶すら危ふしコロナ呆けかも知れず
ウィズコロナ今日も所在なく家居するサクランボつまみ冷酒を飲んで
マスクしてコロナ美人になりすましましいざスーパーへ愉快犯のわれ
夫君亡きあとを青猫と暮らすひと恋するメリー・ウイドウになれ

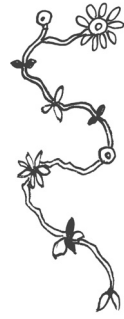
小 嶋 一 郎 佐賀

スーパーの這入りの一円跨げども誰も拾はずわれも拾はず
犬として生れたる者は人として生れたる者に曳かれて歩む
左利き祖父に倣ひし鋏取りはいまだスムーズ右手が手前
大蟻と小蟻が出遇ひ擦れ違ふ振り向きもせぬこのミニドラマ
村中の路はあまねく舗装され立ち小便をする児らも見ず

後 藤 美 子 北海道

「台湾の近現代史の体現者」李登輝氏去る(台湾人)として
一地方の過去の指導者と扱へり中国紙小さく李氏の死を報ず
みな人にマスク着けさせ家居強ふ見えざるCOVID19のちから
「新しき日常」といへばのぞみありコロナ後の世をわれらは生きむ
かへりみて典型とおもふ(要請)を(命令)と聞き自粛する日々
「ユーチューバー」「ティックトッカー」子供らは注目される業をよしとす
「バズったら広告がつく」「自信ある?」「ある」と言はれて終はる面談
学校も乗り換へ可能オンライン授業もサブスクサービスとして
定額を納めてますと(顧客)より役立つ授業を求められむか
『銀の匙』だけを教ふる教師のきおとぎ話のやうな幸ひ

福 士 り か 青森



藤野 早苗 福岡

まだここに染みが 見えざる穢を濯ぐマクベス夫人のご手を洗ふ
マスクせし女三人で読みすすむ好事魔多き帖「花宴」
心うちな綯なふを語源とすれば当たらぬは当たらぬで善しカードをめくる
うぶすなの墓参かなはず羽つよきウスバキトンボに言伝てたのむ
長梅雨の一日時空の旅人となりたり『夏への開』を開き

風間 博夫 千葉

武蔵野線、武蔵国分尼寺跡と国分寺跡高架で分かつ
真言宗豊山派の寺医王山最勝院は武蔵国分寺
真言宗豊山派千蔵院といふ稲毛の寺に義妹眠りぬ
信州産姉が山梨産はわれブドウジュースおくる癌病む弟わとに
鼻で吸ひ口でゆつくり息を吐きさわだつこころ鎮めぬわれは

田中 愛子 埼玉

迎へ火をひとりで焚けるこの夏よご先祖となら密集もよし
友に会はずたまふことなくひと夏をゴーヤの料理せずに過ごしぬ
新聞をしまひおくなり新棋聖の子どもの頃の写真いとしく
菓子、てがみ、辞令、詠草のせてあるわが家の仏壇いつもにぎやか
湯につかり湯船の湯にてなんべんも顔洗ひみん負けたる棋士は

橘 芳園 新潟

いつの日か信得るものと疑はず経誦みてゐき僧侶の日々は
僧にても僧を辞めてもころから称へることが出来ぬ念仏
寺まゐり若くする人老いてせぬ人も椰揄する村人なりき
お東は見せる宝をもたぬからおら金取ると檀徒が言へり
ご維新の淫祠禁止令わが村に届かざりしや男根祀る

水上 比呂美 東京

見つからず駐輪場の二百台にわが鍵と合ふわれの自転車
マンションの十階手摺りより墜ちし蟻の軟着陸を思へり
まだ咲けり百日咲きて百日草祖母が毎朝かぞへてゐたつけ
イタリアのテイボリ出土の銀食器なんのスープを漉へてゐしや
スタンドのシェードにシャネル垂らしをり秋のベッドで本ひらくとき

鈴木 竹志 愛知

移動するリスクに耐へて人に会ふこの歎びを今さらに知る
移動する距離が短くなりゆきて東京はもう遥かに遠し
東京の街を楽しくあゆむ日を信じて今は耐へてゐるのみ
はとバスに乗りて巡るを楽しみに今は我慢の誌上ツアーをす
こゑを聞くもうそれだけで十分なはずなのに会へぬ分だけ長電話

原 賀環子 東京

運河より引きあげて得しゴンドラか 限定本の塚本邦雄
早苗田のみなにも動く影ありてマスクのままで覗いてみたり
あめんぼう「あめんぼう」出所したばかりのやうに眼よろこぶ
泳法は一つきりなり水の面のあやふきに居るあめんぼうたち
送り火をたきつつ思ふ灰被り この火消えたら魔法がとける

水上 芙季 東京

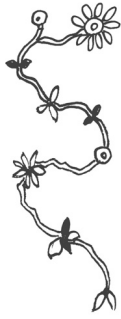
目は口ほどに物は言はない マスクしたわれらしづかに曖昧にをり
健診の帰りに寄つたカフェでけふ二度目の検温されたる今夏
採血をされたわが身が特大のポークカツレッツで満たされてゆく
電車内の手すりが車窓に反射して家政夫の細い眼に見える昼
季語でないサーキュレーター六畳の隅に立ちをり夏も真冬も

大野 英子 福岡

「ない訳ではない」と言はずに「ある」と言へいともあやふや政治家の言
豪雨去り夏の日射しと蟬声に溢るるなにもなかつたやうに
スマホより大事なものはないのでだらう手の中を見つめ立ちつくすひと
横断歩道でペしやんこになるクマゼミの都会暮らしはかく生きがたく
赤カンナ黄カンナすでに枯れはじめ明日は長崎原爆投下日

松尾 祥子 東京

七年前夫と行きたる高野山金堂池に蓮咲きゐたり
をりをりに取り出して見る携帯の画面に仕舞ひおく舞妃蓮まひひれん
瞑目し木下闇にて聞く蟬のこゑは耳朶より湧き来ることし
夫のゐし最後の夏も暑かりき金剛峯寺に蟬啼きしきり
わが裡に七年ねむり羽化したる蟬飛び立てり抜け殻のこる



桑原正紀歌集 令和元年9月刊 二六〇〇円(税別) 送料三〇〇円

秋夜吟 コスモス叢書第1166篇 青磁社

著者住所 〒173-0037 東京都板橋区小茂根三一九一八—一〇六

福岡市文学賞受賞

大野英子歌集 令和元年9月刊 一三〇〇円(税別) 送料三〇〇円

甘藍の扉 コスモス叢書第1159篇 柘書房

著者住所 〒812-0028 福岡県福岡市博多区須崎町三一六—三〇二

島田暉歌集 令和元年9月刊 二六〇〇円(税別) 送料三〇〇円

記憶の炎 コスモス叢書第1162篇 角川書店

著者住所 〒246-0015 横浜市瀬谷区本郷二—一四—一六

水上比呂美歌集 令和2年9月刊 二三〇〇円(税別) 送料三〇〇円

青曼珠沙華 コスモス叢書第1177篇 柘書房

著者住所 〒182-0034 東京都調布市下石原二—二四—四三